

2021年8月1日（日）「神の御前で大志を抱け」

《聖書協会共同訳》 コヘレトの言葉 11:7-10

- 7 光は快く、太陽を見るのは目に心地よい。
- 8 人が多くの年月を生きるなら、これらすべてを喜ぶがよい。しかし、闇の日が多いことも思い起こすがよい。やって来るものはすべて空である。
- 9 若者よ、あなたの若さを喜べ。若き日にあなたの心を楽しませよ。心に適う道を、あなたの目に映るとおりに歩め。だが、これらすべてについて、神があなたを裁かれると知っておけ。
- 10 あなたの心から悩みを取り去り、あなたの体から痛みを取り除け。若さも青春も空だからである。

《新改訳 2017》 伝道者の書 11:7-10

- 7 光は心地よく、日を見ることは目に快い。
- 8 人は長い年月を生きるなら、ずっと楽しむがよい。だが、闇の日も多くあることを忘れてはならない。すべて、起こることは空しい。
- 9 若い男よ、若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を楽しませよ。あなたは、自分の思う道を、また自分の目の見るとおりに歩め。しかし、神がこれらすべてのごとにおいて、あなたをさばきに連れて行くことを知っておけ。
- 10 あなたの心から苛立ちを除け。あなたのからだから痛みを取り去れ。若さも青春も空しいからだ。

【序論】

NHKの人気番組「チョコちゃんに叱られる」の2019年4月13日の放映で「青春はなぜ青い春と書くのか」というテーマが扱われたのを覚えている方もいらっしゃるでしょう。日本では「若さ」に「青」のイメージが置かれているようですが、そこでは次のように説明されていました (<https://sirabee.com/2019/04/13/20162065145/2/>)。

■「春は青い」のルーツは…

気になるテーマに対しチョコちゃんは、「春は青いから」と回答。中国古来から伝わる陰陽五行で季節ごとに色が決められており、春には青が当てはまるからだそう。陰陽五行とは、中国の春秋戦国時代に生まれた思想である陰陽思想と五行思想が融合して生まれたもので、自然界すべてのものを「木」「火」「土」「金」「水」5つに分ける思想。春が木、夏が火、秋が金、冬が水、土は四季それぞれの最終日（おおむね18日）といった具合に定められている。陰陽五行思想における人間の人生は、15～29歳を春、30～44歳を夏、45～64歳を秋、65歳以降を冬とする。さらに春は青、夏は朱、秋は白、冬は黒

と決められており、この2つを組み合わせると若い時代を青春と言われると解説。言葉自体はなんと奈良時代からあったという。

■文豪・夏目漱石も関係？

しかし、現在の青春は若いという意味だけではなく、夢に向かって努力することや恋愛模様という意味合いを持つことが多い。これには夏目漱石の小説『三四郎』が大きな影響を与えたという。『三四郎』は熊本から東京に上京してきた主人公が若い人ならではの迷いや不安、恋愛などを描いた作品。その中には青春という言葉が使われているため、そのイメージが広がり現在のような使われ方をするようになったと解説した。

さて、今日はコヘレトの言葉から「若さ」という事柄について考えてまいります。それに先立ちまず念頭に置いておきたいこととしては、「若さ」について語っているコヘレト自身がおそらく老齢であったであろうということです。つまり、彼は長い人生を歩んできた上で、一つの悟りをもって「若さ」というものを評価しているのです。それは肯定面と否定面の両方を有します。若いからこそできることと、若いからこそ陥りやすい過ちがあるのです。

【本論】

本論1. 若き日と闇の日（7～8節）

光は快く、太陽を見るのは目に心地よい。（11:7）

この一文を普通に読みますと、太陽をまともに見たときの「眩しさ」ばかりがイメージされてしまうかもしれません。しかし、ここで言われている「光」「太陽を見る」とは、比喩的に「生きること」を表しています。つまり、コヘレトは生きることの喜び、心地よさを表そうとしているのです。

幼少期や青年期をどのように過ごしたかは人それぞれ異なりますが、過ぎ去った日々の思い出というのは胸に滲み入るものがあるでしょう。年を重ねることにより、同じ出来事の解釈が変わることもあると思います。私が40代に入ってやってみたことですが、これまでの人生を4年ずつくらいに区切って、各時代に住んでいた場所、記憶にある音、印象に残っている匂い、挑戦したこと、懐かしく思う人などを一つひとつ記録してみました。自分の人生が愛おしく思えるようになり、多くの人への感謝に溢れました。その中でも、脇目も振らずにスポーツに打ち込んでいた日の情熱は、良くも悪くも物事を心

配している隙さえなかったと振り返っております。

**人が多くの年月を生きるなら、これらすべてを喜ぶがよい。しかし、闇の日が多いことも
思い起こすがよい。やって来るものはすべて空である。(11:8)**

必ずしも誰もが「多くの年月」を生きられるわけではありません。しかし、誰であれ生ける限り与えられた人生を喜び楽しむことをコヘレトは勧めているのです。人生を喜び楽しむとは、これまでの本書の文脈に照らして考えるならば、飲食の喜び、仕事の楽しみ、神が与えてくださった賜物を十二分に生かすこと、誰かを愛し愛されることなどに集約されるでしょう。

しかし、その一方でコヘレトはブレーキを踏みます。「闇の日が多いことも思い起こすがよい」と。「闇」とは「苦痛」「悩み」「怒り」「病」「老い」「死」といった事柄を指すでしょう。人生とは「楽しい」ばかりで済むものではなく、どのような局面にも負と思える要素が伴うものだ。私に関して申しますと、青春時代の良き思い出の背後には、自分の人生がどう進んでいくのかが分からない不安や、確立されていないアイデンティティゆえのグラつきというものがあったことも思い出されます。若い頃は当然ながら経験が少なく、分別に欠けること、知らずして無礼を働いていることもあります。そういう自分に気づいていくこともまた、成長の側面と言えるでしょう。

本論 2. 審きの日の下で人生を謳歌せよ (9 節)

若者よ、あなたの若さを喜べ。若き日にあなたの心を楽しませよ。心に適う道を、あなたの目に映るとおりに歩め。だが、これらすべてについて、神があなたを裁かれると知っておけ。(11:9)

本節は基本的に 7～8 節で言われていたことの繰り返しです。しかし、一つ気になることがあります。それは、コヘレトがあたかも自分の思いのままに生きてよいと勧めているように聞こえる点です（心に適う道を、あなたの目に映るとおりに歩め）。そもそも、聖書はアダムが自分の思いのままに歩んだ結果墮落へと突き進んだと語っているのではありませんか。民数記では、律法が与えられた民に対して次のように勧められています。

あなたがたはそれを見て、主の戒めをすべて思い起こし、これを行う。そうすれば、あなたがたは自分の心と目の促すままに淫らな行いをすることはない。(民数 15:39)

このように、神の御心が示された者はむしろ、自分の思いの向く方向にストップをかけてでも神に従うことを選択すべきであると教えられているはずですが、この二つの聖句がバッティングするように見える。では、コヘレトは実際のところ何を言おうとしているのでしょうか。それは、若者にしか備わっていない特性が失われないようにとの勧告で

しょう。若さには勢いがあり、失敗を恐れず、固定観念に縛られるところが少ない。「自分にはこの程度しかできない」という枠がまだ存在しないのです。それゆえに心に大志を抱き、未知なる世界へ踏み出していくことができるのです。若いうちから守りの人生を歩むことは求められていません。聖い志を立て、そこに邁進してほしい。9節前半でコヘレトが言っているのは、そういうことです。

ところが、9節後半においてコヘレトは、「**だが、これらすべてについて、神があなたを裁かれると知っておけ**」とも言います。これは、大志を抱くことと放縦とは同じではない（いや、まったく違う）ということの強調でしょう。そのすべての行動はやがて全知全能なる神の御前で問われることになる。だから、罪に陥るな、欲望に身を任せるなど心に釘を刺します。「**目に映る**」ものは良くも悪くも人に刺激を与え、何らかの行動へと駆り立てます。その良い方（聖い目的）を選ぶようにとコヘレトは勧めるのです。

本論3. 心身の健康を保て（10節）

あなたの心から悩みを取り去り、あなたの体から痛みを取り除け。若さも青春も空だからである。（11:10）

ここで注目すべきは「物事の移動」に関連する二つの動詞（「取り去る」「取り除く」）が使われていることです。「移動されるべきもの」とは、人間の「心」と「体」に蓄積される負の要素ですが、心に関しては特に「**悩み**」が挙げられています。原文では「**אָפּ**／カアス」という言葉が使われていますが、これは「怒り」「苛立ち」「挑発」「悲しみ」「フラストレーション」などと訳される可能性もあります。これらは長く生きるほど積み重なっていくものであり、人の心を病ませ、人生観そのものに暗い影を落とさせるかもしれません。また、誰かから言われた小さな中傷によって、大きく抱いていた夢が損なわれるということもあります。コヘレトはそのように、若者が小さな箱に収まってしまふことを残念に思っている。外から入ってくる「負の言葉」は避けることができません。それを心に残すかどうかはやはり私たち次第なのです。その言葉に囚われることなく、大志を抱き続けてほしい。

次に「体」に関して「**痛み**」を取り除くことが勧められています。「痛み」は原文では「**אָפּ**／ラーアー」で、元々は「悪」を意味します。フランススコ会訳では「病」と訳されている。人生を喜び楽しむためには健康であることが大切であります。自分の意志とは関係なしに襲いかかってくる病も多いものです。健康を損ねると心もまた落ち込みがちになるでしょう。だから、コヘレトは手の届く範囲の不快な要素は、できる限り追い払うよう勧めるのです。

さて、10 節最後のフレーズでは、「若さも青春も空」だと言われています。これは本質的に、人生における若い時代は短く、瞬く間に過ぎ去ることが言われているのでしょう。「青春」という言葉について冒頭で少しふれさせていただきましたが、ここでのヘブル語原文で使われている言葉は「青」ではなく「黒」であるという点が面白い。ヘブル人にとって「若さ」が「黒」に例えられる理由は、おそらく「白髪の老人」に対して「若者の黒い髪」がイメージされているからでしょう。

【結論】

今日の箇所は特に若者に向けてのメッセージに特化されていますが、12 章では老人に焦点が当てられます。人生における二つの時代が並置されているという点が重要なのです。若い頃は、どうしてもお年寄りの気持ちが分からないもので、背中が曲がって速く歩くのが困難になった人を見ても、なかなか「自分にもその日が来るのだ」とリアルに考えることができないかもしれません。しかし、その日は確実に到来することを自覚しつつ、今しかない若さを十分に生かしてほしいとコヘレトは勧めています。「**若き日に、あなたの造り主を心に刻め**」(12:1) というワンフレーズは、そのすべてを語っているでしょう。その心が柔軟な時期に何を吸収すべきであるか。それは、人生の全き基盤を確立する神との関係です。今日の箇所では「神の審き」を心に留めるべきことが添えられていましたが(9 節)、聖き神の御前にある自分をいつも見つめながら、高い志を抱いて生きるべきことが教えられているのです。同時に、年を重ねた人々には次のパウロの御言葉が生きてくるでしょう。

だから、私たちは落胆しません。私たちの外なる人が朽ちるとしても、私たちの内なる人は日々新たにされていきます。(Ⅱコリント 4:16)

【祈り】

若き日にも老いた日にも共にまし給う、天の父なる神様。人は若き日にこそ志を抱き、人生の進むべき道を見出していきます。しかし、同時に失敗の多い時期でもあります。何より大切なことは、人生の与え主なる神と出会うことであり、その御心を知ることです。神を心に据えるとき、人の歩みは確かなものとなります。また、年老いた日々においても、何歳になっても、主と共に生きる幸せにあずかせてくださり、尚も若々しい心と大志をもって歩ませてくださいますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人生の若き日々に、己が創造主を見出させ給う、父なる神の愛、
その心に聖い志を抱かせ、神の業に参加させ給う、主イエス・キリストの恵み、
老いたる日にも共にまし、内なる人を常に新しく造り変え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。